

きれいな水を呑ませたかった

小樽 夏加

中央二丁目

一九四五年（昭和二〇年）八月一日、突然学徒兵として鉄道連隊に入隊していた兄が、九州より千葉県の連隊に行く途中、我が家に立ち寄った。二・三枚のシャツ（着古した）をおいていくと言ったけれども、私は軍隊の物を一つでもおいていかれるのがいやだったが、長持の奥深くしまっておいた。後で役に立つとは思ってもよらなかった……。

市内と市外の境の町、長束^{ながが}の吉村酒蔵所に一部の中隊が疎開していた。当時、食糧営団に勤めていた私は軍の用事を頼まれ、自転車で長束土手までさしかかると、荷馬車や大八車、人、人、人……。どうしたはずみか車にぶつかり十メートル下の田圃^{たんぼ}に落ちてしまった。

そのため六日は営団を休み家にいた。八時過ぎ、警戒警報が解除になったので、家の中に入るか入らないうちに、目もくらむほどの強烈な光と同時に、束^{たば}になった硫黄^{いおう}のマッチに一度に火がついた時のような、むせかえる、なんとも言えない匂いがかいだ。

轟く音、私の家に爆弾の直撃を受けたのかと思った。当時つしよに勤めていた父は（自宅より営団までの距離二〇メートル）ぬかだらけになって、大きな声で「夏加、夏加、無事か」、「お父さん大丈夫よ。営団の皆さんは」と言って、しばらく立つことが出来ない。

「お父さん、和夫は大丈夫かしら。己斐^{こいまい}町もやられたかしら」弟が心配になって、「見てくるから、夏加はここから出てはいけないよ」と言って父は表に出ていった。

私は営団に行つて見る。精米所の中は、うず高く積んであった米俵は容赦^{ようじやう}もなく散乱している。働いていた皆さんは、よくまあ……。怪我^{けが}もしなかったものだと、思っただけでもぞつとずる。弟を探しに出かけた父はなかなか帰つてこない。

数十分して、避難する人々がどんどん増えるばかりだ。その人たちは皆怪我^{けが}をしている。頭から、顔から血を流し、中には裸体で歩いている人、全身の皮膚がつるりとむけて足のくるぶしの所でとまり、その皮膚をひきずりながら歩いている。我が

家をめざして帰るのであるのか。(途中で亡くなったのではないだろうか。)

傷ついた牛や、馬も、大勢の人の行く方向に向かって行けば助かると思つてか、人の後を黙々と歩いて行く。営団の通りは横川から可部かべに行く国道である。避難者は火災の無い方向にむいて行く。

横川にいた従弟(当時小学三年)が、目の見えない祖母をつれて私の家までたどりついた。全然怪我也なく、ただ祖母の髪の毛は針金のように逆立していた。

長束駅の近くも火事、住田酒造所の前は焼落ちた(光と同時に火災になった)。長束もあぶないからと、私は祖母たちを久地(地名)に行かせる。心配していた父が、頭からずぶぬれになつて帰つて来た。

「お父さんどうしたの」、「駅の近くまで行くと、住田さんの前が焼けて酒蔵さけくらに火がつきはじめた。酒蔵に火がついたら、このへん一帯火の海になるからな」。だれ一人消す人はいなかったようだが、父は一人で消したらしく、人ごとのように話していた。また私の防空頭巾をかぶり、出かけて行つた。

血まみれの兵隊さんに、兄のおいていったシャツを思い出して着せてあげる。白島の隊はくしまにいた衛生曹長えいせいそうちやうの叔父も、全身血まみれになつて来た。兄がもつとたくさんおいていってくればよかつたと思う。祖母たちが元気であることがわかると、救護

のため叔父はまた市内に向かつた。

夜になるというのに、己斐こひまでどうしても行かれない。弟のことを心配しながら、山麓さんろくに逃げ、野宿し、朝になると帰る。四、五日このようなことを繰り返していた。

八日の昼にやつと弟に逢あえる。戸山に帰ろうと言っても、勝つまでは頑張ると言つて、己斐の鉄道の寮に帰つた。父方の従兄の奥さんが、青白い顔で、ふぬけのような姿で家の前に立っていた。(当時、鷹匠たかしやう町の配給所に勤務)「助かつたのね」：言葉にならない：「今までどうしていたの」。

弟は皆の行方しやうたふ(姑—父の姉、娘、義弟)がわからないので、夜になると新庄橋しんじやうばしの竹やぶに野宿し、朝になると探し歩いていたそうです。(食事もとらずに)ひとまず戸山に帰るようにおすすめだが、まだ探し歩くと言つて父を困らせていた。

戸山に帰つてから脱毛、歯ぐきからの出血、紫斑などの症状が現われ、一ヶ月後に亡くなった。私も十一日頃より身体がだるく、猛烈な下痢で身体が動かなくなる。

父は外傷一つ無く、じょうぶにまかせて行方のわからない近所の人や、親類の人たちを、毎日声を枯らして探し歩いていた。八月十五日終戦放送、身動きできない私はただ泣くばかり、でも恐い思いをしなくてもよい……。

無傷だつた父も十七日頃から身体の不調を訴え、兄が兵隊から帰るまでとは言つていたが、兄の顔を見ると安心してか容体

が悪くなり、水、水と言っていたが、当時水を飲ませるとこの病気にはだめだと言われていた。

私は兄弟のいない間に水まぐらの口金をはずし、それを飲んだ。おかげで敷布団はびしょ濡れ、父が亡くなる前の日、水をくれ、水をくれと言ひ、ちよつと油断している間に、父はタオルを濡らす洗面器の中に顔を入れ、ごくん、ごくんとおいしそうに飲んでた。きれいな水を飲ましてあげたかった。

熱い、熱いと火のような身体をもてあまし、急に起き上がったと思えば横になり、また起き上がり、心臓の苦しさを訴える。兄と弟は胸をさすり、父が軽いいびきをかきはじめたので、二人は横になる。

眠れない私は、時々大きないびきをかく父があまりにも静かなため、「お父さん、お父さん」と呼んだところ返事が無いので、いざっていつて見ると、父はもう冷たくなっていた。兄たちを起こす。二十七日、午前四時頃。

当時下痢をしていた者は、疫痢えきりと言われていた。私はむしろのタンカに乗せられ、祇園ぎおんの隔離病舎かくりに連れていかれる。私の身体の中がとけていくみたい。物は食べられず、下痢（血便）ばかり。治療といっても瓦のかけらから塩を焼いておなかの上に乗せ、腸が動かないように、じーつとして温めているだけ。やせこけているどころか、ぶくぶくにむくみ、足の甲こうを指でおさえると引つ込む。一日がかりで元にもどる。二、三度死線をさ

まよっていた。

先生が「この人、かわいそうだが、身内に伝えて下さい」と言っているのを、私は人ごとのように聞いていた。

そのはず、髪の毛は、バサツ、バサツと抜け、皮膚はジャガイモの皮をむくように、ペロリとむける。この病舎から助かって帰る人はまれ、私はよくよく悪運が強いとみえ、薬も無く、よく元気になれたと思う。

（遺稿 一九九三年（平成五年）没。くも膜下出血、享年六六歳）

